

「第二次日本経穴委員会」便り

～第21回 3カ国一致でも検討 委陽、浮郄の例～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 こはやしけんじ 小林健二

はじめに

非公式会議も今回で6回目。なぜそれほど長い時間を要するのか?!と疑問に思う方がいるかもしれません。実は、現在使われている3カ国の教科書で一致する経穴でも、古典と照らし合わせ相違のあるものもチェックを入れて検討しているのです。

例えば、委陽 (BL39)、浮郄 (BL38) 等は、3カ国一致ですが、基本となる古典と相違があるのです。そんな話を今回致します。

3カ国の教科書と古典の相違

日本・中国・韓国の教科書では、いずれも位置の表現は違いますが「委陽：膝窩横紋の外端、

大腿二頭筋の内縁に取る (学校協会編引用)」で一致しています。

では検討しないで次に進んでよいか、といいますがそうではなく、古典の記載と比較し検討していきます。

何が問題でしょうか? 『鍼灸甲乙経』では次のように記載されています。

「委陽、三焦下輔兪也。在足太陽之前、少陽之後、出於膕中外廉兩筋間、扶承下六寸、此足太陽之別絡也」

(委陽、三焦の下輔の兪なり。足の太陽の前、少陽の後にあり。膕中の外廉兩筋の間に出ず。扶承の下六寸。此れ足太陽の別絡なり)

問題になるのは「扶承下六寸」の句です。(注：扶承とは承扶のことです)

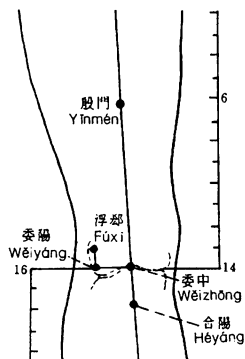


図1 中国の図版

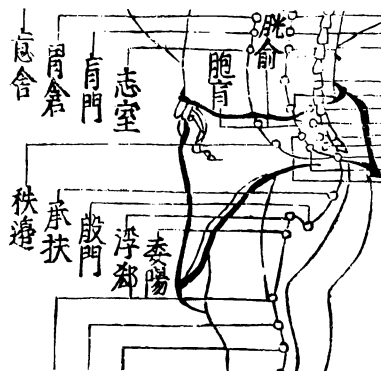


図2 類経図翼

この句をそのまま踏襲し、図版にしたのが『十四経發揮』『類経図翼』等に見られます。

明らかに委陽が大腿部の中央で股門に並ぶ高さの外側で、浮郄 (BL38) をその上1寸に取る位置にあります。

承扶 (BL36) の下6寸は、股門 (BL37) です。「股門：在肉郄下六寸 (『甲乙』)」

どちらも同じ位置にあることとなります。

古典を整理してみます。

【靈 枢】在足大指之前，少陽之後，出于膕中外廉。

【甲 乙】在足太陽之前，少陽之後，出於膕中外廉兩筋間，扶承下六寸。

【千金方】在足太陽之前，少陽之後，出於膕中外廉兩筋間，扶承下六寸。

【千金翼】在足太陽後，出于膕中外廉兩筋間，承扶下。

【外 台】在足太陽之前，少陽之後，出于膕中外廉兩筋間，承扶下六寸。

【素問注】在足膕中外廉兩筋間。

【医心方】在足太陽之前，少陽之後，出于膕中外廉兩筋間，扶承下六寸。

【銅人A】在承扶下六寸。

【銅人B】在足太陽之後，出於膕中外廉兩筋間，屈伸取之，承扶下六寸。

【銅人C】在 足太陽之前，少陽之後。

考 証

「扶承下六寸」を衍文と見るかどうかの意見では、江戸の原南陽『経穴彙解』では次のような考証をしています。要約しますと次のような意見です。「委陽は、千金・外台・資生・聖濟等、みな承扶の下六寸に作る。しかし承扶の下六寸は股門穴である。扶承下六寸の五字は衍文である。千金・外台・資生・聖濟等みなこの誤りを踏襲している。諸家は承扶下六寸の字を見

て膕中外廉の字を重視して見ていない」と。

さらに、有力な意見を中国側が提示していません。「脉と穴を誤混」という一説です。

「宋以前の鍼灸文献に診脉部位・経脉・腧穴の名称が全く同じものがある。たとえば、「足陽明」は、趺陽脉を指し、足陽明経脉を指し、経穴名 (衝陽) を指す。一般的には、「足陽明」は鍼灸方では経穴名を指す。後人はこの例に不明なために、宋以前の鍼灸文献に誤った解釈を生んでいる。また十五絡穴名は、もとは絡脉名である。委陽・大包ももとは絡脉名である。早期の腧穴書の絡穴や、絡穴定位の文章の中には、絡脉循行部位に関する記述が残っている。歴史的に見て、絡脉循行部位を絡穴部位に誤ったことにより、腧穴の定位に分岐を生じた最大のものは委陽である。『甲乙経』に「委陽、在足太陽之前、少陽之後、出于膕中外廉兩筋間、扶承下六寸、此足太陽之別絡也」とあり、足太陽別絡の走行について記述されているから、「膕外廉」と「扶承下六寸」は異なった部位である (『甲乙経』の大包穴下にも同様の絡脉の走行部位がある)。絡穴の定位法則によれば、委陽は膕外廉に位置するはずで、委中の外側 (陽側) という意味で命名もされている。後人がこの意味を了解しないで扶承下6寸の処、つまり股門と同じ高さのところに定位している」以上『鍼灸名著集成』 (華夏出版1996年)、『中国針灸学術史大綱』 (華夏出版2001年) より引用。

まとめ

中国の昔の図版を参考にし、江戸期の註解書も調べ、現代の研究論文を駆使し一穴一穴を討議し、これからのグローバルな鍼灸のベースになるよう日々、努めている第二次日本経穴委員会であります。

(〒356-0031 埼玉県ふじみ野市福岡中央1-6-2)